

中国の山に登る

帝塚山学院大学 名誉教授
蘇州大学 客員教授

山田 博光

1990年代に機会があつて、中国の二つの山に登りました。一つは中国と北朝鮮の国境にある長白山で、山頂に天池と呼ばれるカルデラ湖のある名山です。滿州族と朝鮮族にとつては聖なる山として崇められています。もう一つは安徽省にある黄山で、奇岩怪石と松の風景に恵まれた、水墨画の世界を連想させる、観光客に人気の行楽地です。

21世紀になつて、5年間中国（主として蘇州）に住むようになり、休日を利用して最初に登つたのが、山東省の泰山です。中国で宗教上の靈山とされている5岳の中で、一番有名な山です。蘇州を含む江蘇省は、長江と淮河のデルタ地帯ですから、山はほとんどありませんが、かつて島だつたといわれている連雲港の花果山にも登りました。標高はわずか624メートルですが、江蘇省の高山で、「西遊記」の主人公孫悟空の生まれ育つた山として知られています。

蘇州の市内には山はありませんが、郊外の太湖近くには、標高300メートル前後の山（岡？）がいくつあります。美女西施の夏の宮殿跡のある靈岩山、紅葉の名所天平山、孫武（孫子の兵法の著者）の旧居の山（岡？）がいくつあります。美女西施の太湖南くには、標高300メートル前後

の登山の習慣から、登山靴・リュックサック・杖などで登るのですが、中国人はみんな旅行の服装なのです。極端に言えばハイヒールで山に来るので。また、それでも登山可能なのです。長白山は山頂までマイクロバスで行けます。黄山・泰山・花果山にはロープウェイが完備しています。それを使わなくとも、山道はすべて石の階段です。

日本では1905年にウエストンの指導で日本山岳会が誕生したころ、登山をスポーツの一環と考えるアルピニズムが入ってきましたが、中国にはアルピニズムが入つて来なかつたのではないか、中国人にとっては、山はあくまでも行楽地、物見遊山の対象ではないかと考えるようになります。

蘇州の近郊の山も人が行くのはすべて公園化された山で、入場料を取る代わりに、山道はコンクリートの階段で歩きやすくなっています。公園化されていない山に七子山というのがあります。登ろうとしたら林道の入り口が柵で閉ざされていましたが、なんとか登山路を探して登つたところ、人が殆どいなくて寂しい思いをした代わりに、リキュウバイ（利休梅）・ナニワイバラ（浪速茨）の原種、トキワマンサク、ミツバツジなどに巡り合いました。公園化された山では会えなかつた花木です。